

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	陳 雨
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
中国における校内研修としてのレッスン・スタディに関する社会学的研究			
論文審査担当者			
主 査	教 授	山 田	浩 之
審査委員	教 授	藤 村	正 司
審査委員	教 授	曾余田	浩 史
審査委員	准教授	尾 川	満 宏
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、中国におけるレッスン・スタディの広がりの実態を明らかにし、それが中国の教育や教員にどのように影響を与えているのかを批判的、実証的に明らかにすることを目的としている。</p> <p>近年、中国ではカリキュラムの改革が進められるにともない、レッスン・スタディの意義が主張され、その活性化がさらに求められるようになってきている。その結果、レッスン・スタディの効果が評価される一方で形式化が批判されるようになってきている。本研究は先行研究を踏まえながら、4つの課題、すなわち、1)レッスン・スタディ普及の実態、2)学校間・地域間による違いと学校への影響、3)教員のレッスン・スタディをめぐる意識、4)レッスン・スタディが教育や教員に与える影響を明らかにしようとしたものである。</p> <p>論文の構成は以下の通りである。</p> <p>第1章では、レッスン・スタディに関する制度の変遷を概観している。その後、日本、および、中国でのレッスン・スタディに関する先行研究をまとめ、その限界と課題が検討されている。その結果、レッスン・スタディは授業実践との関わりのみで論じられており、教員や社会との関わりで捉えられていないこと、また、レッスン・スタディに対する批判的な視点が欠如していることを指摘している。</p> <p>第2章では、分析の枠組みと調査の概要について整理されている。また、本研究の分析の視点が示された後、調査の手続き、概要についてまとめられている。</p> <p>第3章では、中国でレッスン・スタディが具体的にどのように行われているかを概観している。分析により、レッスン・スタディの実施状況にはばらつきがあり、教員の認識にも期待と批判が同時に存在していた。そのことはレッスン・スタディをめぐる自由記述にも表れ、教員が期待と不満を持っていることが指摘された。</p> <p>第4章では、学校の置かれた社会的文脈に着目しながら、中国におけるレッスン・スタディの広がり状況が検討されている。具体的には、農村部と都市部、重点校と非重点校といった地域と学校によるレッスン・スタディの実施状況の差が分析される。その比較検討を通して、レッスン・スタディは地域と学校により広がり差が生じており、また、そ</p>			

の差は教育の質の差を拡大させる可能性があることが指摘された。すなわち、資源配分の少ない地域・学校では、レッスン・スタディの改革が表面的なレベルにとどまり、根本的な改善は行われない。一方で、教育資源に恵まれた学校・地域ではレッスン・スタディが広がり、教育の質が改善されている。こうして地域間、学校間での格差が助長されていることが指摘された。

第5章では、教員によるレッスン・スタディの効果に対する認識が検討されている。すなわち、レッスン・スタディを通してどのような資質が向上したかなどの教員の認識が分析されている。また、それらの認識が、教員の個人的な文脈によりどのように異なっているのかが検討されている。その結果、レッスン・スタディを通して向上した能力に対する教員の認識には偏りがあり、教員の属性や役職に影響されることが指摘された。

第6章では、教員のレッスン・スタディに対する認識の特徴とそこにかがえる教職に対する意識、個人の属性および労働環境の与える影響について検討されている。結果として、教員の期待とレッスン・スタディの実態との間にギャップがあることが確認された。また、教員の認識は、役職や給料など学校との関わり、勤務環境に影響されることが明らかにされた。

終章では、本論文の知見をまとめるとともに、中国でのレッスン・スタディ改革の形骸化やそれが地域間、学校間の格差を拡大させる可能性について検討が行われている。

本論文は、次の3点で高く評価出来る。

第1に、レッスン・スタディをめぐる広がりや状況と教員の認識を対象とする実証的・方法論的視座を提示したことである。本論文ではレッスン・スタディの主要な形態を整理し、調査の信頼性を確保している。そのことにより、表面的な調査にとどまるのではなく、レッスン・スタディに対する実証分析という研究の地平を開くことを可能にしている。

第2に、社会学的な視点から考察することで、客観的な立場からレッスン・スタディを捉え直していることである。つまり、本論文はポジティブだけではなく、ネガティブな視点からも、レッスン・スタディの影響と課題が指摘されている。この視点は教育格差、教員の社会化といった社会的な理論に基づき、複雑な社会状況からレッスン・スタディの広がりや分析を可能にするものである。

第3に、レッスン・スタディという実践に具体的な改善策を提示したことである。本論文では、レッスン・スタディの主体である教員と地域間・学校間の格差という二つの側面からレッスン・スタディの改善策が検討されている。教員については、その主体性を重視することや職場環境全体を見直すこととの関連で改善策が指摘されている。また、地域間・学校間の格差については、農村部、非重点校での指導を強化するのみでなく、強いリーダーシップを持った教員の育成が示唆されている。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和3年7月29日